岩手大学震災復興推進レター

「岩手の復興と再生に」オール岩大パワーを

vol.29

発行者
国立大学法人
岩手大学
総務企画部総務広報課
〒020-8550
岩手県盛岡市上田3-18-8
TEL 019-621-6015
FAX 019-621-6014
E-mail kkoho@iwate-u.ac.jp

平成26年5月30日発行

http://www.iwate-u.ac.jp/koho/fukkouletter.shtml　岩手大学ホームページからもご覧いただけます。

被災地学修がスタートしました

昨年度、岩手大学は文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」に採択され、今年度から県内の多様な地域課題を解決する実践的な人材育成を目指す「地域と創る“いわて協創人材育成＋地元定着”プロジェクト」を本格実施しています。

このプロジェクトは、地域の歴史・文化・特色を理解し、異分野の専門家との協働で自らの専門性を地域の課題解決へ実践することができる人材の育成を目指しています。プロジェクトの一環として、今年度から、全学部1年生の必修科目の中に「被災地学修」を組み込みました。学生たちは、平均30人～40人程度の規模で県内の沿岸部を訪問し、震災による被害状況や復興の様子、またその地域の産業・文化・まちづくりの現状などのテーマについて、現地の行政機関や企業、NPO法人の方などから話を聞き、グループ討論等を行います。

被災地学修の第一陣として、4月26日に農学部共生環境課程の62名が大槌町を訪問しました。大槌町での学修では、同町で復興ツーリズム事業や語り部ガイドなどの取り組みを実施している一般社団法人「おらが大槌夢広場」の方に津波で壊滅的な被害を受けた町内を案内していただきながら、復興へのまちづくりで直面している問題についてお話を伺いました。

今後、8月末までの間に1152名の1年生が沿岸10市町村を訪問する予定です。震災により大きな被害を受けた被災地を訪れることでPTSD（心的外傷ストレス障害）などが懸念される学生には震災を想起させない研修機会も用意し、柔軟に対応できるよう努めています。

例年、本学新入生の約6割は県外出身者で、県内出身者でも被災地を訪れたことのない学生もいます。岩手大学では、今回のような被災地での学修を通して、自分たちが学生生活を送る岩手県という地域に目を向け、それぞれの地域が抱える課題を見つけ出し、それらの課題解決に貢献できる人材を育成していきたいと考えています。

大槌町にある仮設住宅前での研修の様子

三陸鉄道再開イベントに参加しました

4月5日、教育支援部門芸術・体育支援班では、三陸鉄道南リアス線全線再開にあわせて、「すぺすぺプロジェクト」を実施しました。「すぺ」とは、大船渡市の方言で「～しましょう!」という意味があり、教育学部芸術文化課程美術・デザインコースの学生が中心となり、アートを通じて、三陸鉄道と沿岸被災地の復興を目指し、東北地域を笑顔にしていくことを目的に取り組んでいます。

現在は岩手日報社・河北新報社・福島民報社が主催する「スマイルとうほくプロジェクト」と共同で、大船渡の三陸鉄道南リアス線を中心に活動しています。平成25年度は三陸鉄道南リアス線（盛～吉浜駅区間）の再開通日にあわせて、記念車輌に装飾したり再開イベントの応援を行ったりしました。また、初夏には三陸鉄道恋し浜駅にヒマワリやニチニチソウを植えたり、秋には復興のメッセージを書いた手袋をはめて列車に向かって手を振る「手ふりアート」に取り組んだほか、3月には、全線開通する三陸鉄道に興味をもってもらうために盛岡市内で「手ふりアート」のワークショップも開催しました。

車内にひまわりを装飾中の学生たち

今年度は吉浜～釜石駅間の全線開通にあわせ、全線開通日前日の4月4日、全線開通記念貸し切り列車に車内デコレーション作業を実施し、復興のシンボルである“ひまわり”を装飾しました。また、開通当日は盛川橋梁チームと陸前赤崎駅付近チームの2チームに分かれ、イベント列車に向かって手を振る「手ふり」ポイントへ移動し、待機しました。

それぞれ午前3回、午後2回、岩手日報社の方々や地域の方々と一緒になって、手がちぎれんばかりの勢いで「手ふり」を行い、三陸鉄道再開を盛り上げました。この日の大船渡は雪交じりでとても風が強く寒かったですが、地域住民の方々が列車に向かって大きく手を振る姿を見て、三陸鉄道が地域の方々に愛されていることを改めて実感しました。

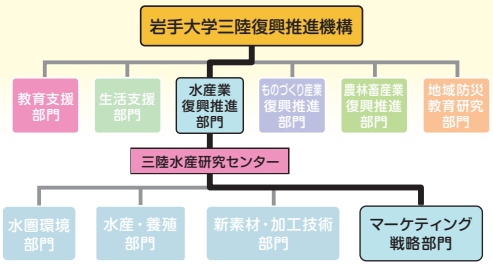
学生たちは、地域の方々と一緒に三陸鉄道全線開通日に立ち会えたことをうれしく感じ、顔には達成感が満ちあふれました。学生や地域の方々が作った応援メッセージ入りの手袋は三陸鉄道吉浜駅に展示していますので、興味のある方は是非三陸鉄道吉浜駅までご乗車してはいかがでしょうか。

装飾が終わって記念写真

応援メッセージを書いた手袋をはめ、通過する車輌に向かって手を振る学生たち

岩手大学三陸復興プロジェクト

岩手大学では岩手大学三陸復興推進機構を設置し、地域の行政や住民、他大学、企業等と連携を図りながら、教職員・学生が一丸となって東日本大震災からの復興に取り組んでいます。今回は、山田町で水産加工品の商品開発等に取り組んでいる三陸水産研究センターマーケティング戦略部門の活動の一例を紹介します。



デザイン学の視点から復興支援にアプローチする

岩手大学三陸復興推進機構 水産業復興推進部門
（三陸水産研究センター マーケティング戦略部門長）
田中　隆充（教育学部　教授）

4月から部門長を拝命しました。今回は私の専門分野と部門の中での活動を紹介したいと思います。専門は「デザイン学」です。デザインという言葉は皆さんも日常的に使われていると思います。我々が日常使う「デザイン」という言葉には、人々に「美」や「快適性」等を提供する意味もあります。また、地域の文化、歴史、技術といった「見えにくい」コトを従来にない発想で活用する考え方やビジネスモデルを構築する役割もデザインの一つです。両者のデザインの考え方を相互作用させることは復興において大事なことです。

本部門で活動した例では、山田町のプロジェクトがあります。同じ地域でも幾つもの企業を同じタイミングで同時に支援をすることはなかなか出来ません。そこで、山田町から要請をいただいた商品開発等では各企業をアピールするのではなく「山田町」そのものを売り込めるような取り組みを始めました。写真にあるように「山田の」をフォーマットとしてつくり、支援をする対象の商品名をその後に付けました。例えば「山田の牡蠣のつくだ煮」「山田のしょうゆラスク」「山田の浜寿司」は全て異なる企業（生産者）で作られている商品です。山田という名前はほぼ全ての都道府県に同名の市町村があるそうです。また、名字は全国で12番目に多いとされています。これら山田に関係する方々をターゲットとするだけでも震災前にはなかった新たなマーケット開拓の切り口になるはずです。テレビ番組の笑点で有名な山田隆夫さんは岩手県山田町応援団の団長をしてくれています。

山田町のようなアプローチは学術研究という意識を強く持ってしまうと出来ません。学術論文を執筆することを主とするならば、支援する対象を選ばなければなりません。しかし、津波で更地になり必死に生き続ける人々を見ると論文のために活動を行うという気にはなりません。研究者である前に岩手の復興を願う一県民だからです。今後もマーケティング戦略部門では、ブランド戦略や国内外での流通・販売戦略立案、商品開発等を通じて、水産業の復興支援を進めてまいります。

‘山田’を全面的に PR したデザイン

釜石サテライトだより

最近は、20度を超える暖かい日も多くなり、桜はもう散ってしまいましたが、山々は新緑に生まれ変わりました。

4月から、3名の職員、研究員が新たに釜石サテライトに着任し、新体制でスタートしました。

最近の釜石サテライトの活動状況について報告します。

●岩手県水産技術センターとの情報交換会

釜石サテライト（三陸水産研究センター）の隣には、岩手県水産技術センターがありますが、お互いを知らないため見えない壁があるようで、まだ、研究者間の交流がほとんど行われておりません。

4月の人事異動により新たな体制になった機会を利用して、岩手大学からの申し入れにより、情報交換会を開催することとなりました。

総勢40名以上もの参加者となり、お互いの研究に関心があることが確認されました。

岩手県水産技術センターは100年以上もの長い歴史がありますが、我々の三陸水産研究センターはまだ1年生であり、現場との信頼関係や研究実績について、岩手県水産技術センターを目標にがんばっていきます。

情報交換会では、お互いのトピック的な研究の紹介を行い、震災復興に対する研究や連携を強化するにはどのようにしたらよいかなどについての議論を行いました。

岩手県水産技術センターの参加者

岩手大学側の参加者

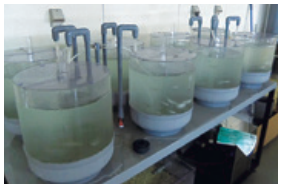
もっと早くこのような機会を持つべきであり、今後も開催すべきという意見も出されましたので、研究者がお互いの施設を気軽に訪問し、お茶を飲みながら研究雑談ができるような体制になるようにしていきたいと考えます。

●サケ稚魚の飼育実験を開始しました

釜石サテライトでは、1月末に取水工事が完了して、本格的な生物の飼育実験が開始されました。

唐丹町漁業協同組合片岸川サケマスふ化場から200尾ほどのサケ稚魚を提供して頂き、3月からサケの飼育実験を開始しました。

近年、サケの回帰数が減少しており、その原因の一つとして、水温の変化などの海洋環境の変動が大きくなっていることが影響を与えているのではないかと考えられています。この実験は、環境の変化に強いサケの遺伝子を見つけ出すための研究の一環として行われています。


サケ稚魚の飼育実験

今後、様々なプロジェクトが展開される中で、現場窓口としてサポートさせていただきます。

連絡先　**岩手大学三陸復興推進機構釜石サテライト**
〒026-0001 岩手県釜石市平田第三地割75-1
TEL:0193-55-5691（代表）／FAX:0193-36-1610
E-mail:kamaishi@iwate-u.ac.jp
URL:http://www.iwate-u.ac.jp/reconstruct/kamaishi/

Information

水産加工業車座研究会 in 大船渡

水産に関する課題を発見し、大学との連携で解決に繋げることを目的に、ミニ講演と車座形式での意見交換会を開催します。

日時：6月28日（土）14：00～17：00
会場：大船渡市魚市場　多目的ホール　ホールA
（大船渡市大船渡町字永沢 209　☎0192-26-4111）
対象：釜石、大船渡地域及び気仙沼市内の水産加工業者、漁協関係者、流通販売業者

<プログラム>

(1) ミニ講演（各30分）
岩手大学と東京海洋大学の教員を講師として、「加工」、「水産物の機能性」、「ブランド化」等の3題について講演予定。

(2) 車座形式での意見交換会（参加者は下記のテーマに分かれて参加）
①商品開発・魚食普及　③水産物の有する機能性
②ブランド化　④加工工程改善・生産拡大
（予定）

お問い合わせ　釜石サテライト　☎0193-55-5691　✉kamaishi@iwate-u.ac.jp

編集後記

「地（知）の拠点整備事業」では、被災地での学修を踏まえた上で、自身の専門を岩手の課題解決に還元できる人材の育成を目指しています。また、学生たちは三陸鉄道再開イベント等の催事に参画し、復興に携わっています。復興支援活動を通じて学生が成長し、地域に貢献できる人材となれるよう、学生の教育面からも復興に向けた取り組みを展開してまいります。